

# POC・APOC の 30 年を振り返る

アジア太平洋オリエンテーリング選手権大会の 30 年

小野盛光

日本のオリエンテーリングの大きな支えであったアジア・太平洋オリエンテーリング選手権大会が終わり、アジア選手権大会に引き継がれる。海外選手の走りに感動したり、海外でのオリエンテーリングを楽しむきっかけになった大会のさまざまな思い出を綴ってみたい。

## POC、APOC のスタート

オーストラリアオリエンテーリング連盟会長テッド・ウェスター氏がかねてから提唱していた太平洋諸国の国際的なオリエンテーリング大会が実現したのが 1980 年。

### POC 開催国

- 1980 オーストラリア
- 1982 日本

### APOC 開催国

- 1984 ニュージーランド
- 1986 香港
- 1988 オーストラリア
- 1990 カナダ
- 1992 日本
- 1994 ニュージーランド
- 1996 香港
- 1998 中国
- 2000 オーストラリア
- 2002 カナダ
- 2004 カザフスタン
- 2006 香港
- 2008 韓国

## 第 1 回大会はオーストラリア

第 1 回は 1980 年 4 月 11 日リレー、13 日個人戦がオーストラリアのキャンベラ近郊で開催され、オーストラリア、ニュージーランドを中心に約 800 名の参加があり、日本、フィリピンからの参加もあった。日本からは当時日本オリエンテーリング委員会専門委員だった田口肇さんら 3 名が参加した。

走行可能度抜群のユーカリの林に加え、道など線状特徴物の少ないオーストラリアのゲレンデ（テレイン）は等高線のみで走るようなもの。ゲレンデのよさを生かしたコース設定に、これぞ OL と田口さんはオリエンテーリングニュースで報告されている。

地図の図化はスウェーデンに依頼したが、調査はオーストラリアのホッグさん一人で行なっているため、内容が統一されていたとのこと。

## 強烈な刺激だった日本開催

第 2 回大会は昭和 57 年（1982）1 月 15 日から 17 日に埼玉県の当時の東松山市、嵐山町、越生町、鳩山村、滑川村、玉川村で開催された。1 日目は個人戦とトリム O、2 日目に個人戦を開催。2 日目の HE、ME を環太平洋選手権大会に充てられた。最終 3 日目にリレーが開催された。大会の主催者は（財）健康・体力づくり事業財団と朝日新聞社であり、連日エリートやトリムなどの大会様子が 1 面やスポーツ欄、社会面に大きく報道され、地方版には関係者の成績が掲載され、新聞を買い求めた。

エリートでは世界の第 1 人者も多く参加し、日本のソフトな山肌を駆け抜けた。たとえば男子ではスウェーデンの J. マルテンソン、ノルウェイの O. ソン、女子ではノルウェイの B. ボールデン、スウェーデンの A. クリングスタッドなどが報道関係者も驚かす走りを見せた。また、日本勢も安藤尚一や筑波大の多田正純、長田（現在、高野）由起や出水（現在、村越）久子らも上位に食い込んだ。

環太平洋選手権リレーにおいてはオーストラリアと厳しい戦いを演じ、井手裕子、出水久子、長田由起で組んだ女子はオーストラリアを抑えて優勝、石井龍男、小山格、山岸倫也で組んだ男子はオーストラリアに敗れ残念ながら 2 位に終わった。なお、今回ニュージーランドは他のクラスでは活躍したが、選手権には出場していなかった。

海外からの 7 カ国 101 名の参加者を含め、個人・トリム合わせて約 2600 名の参加者があり、コース上の道も参加者で埋まった。

とにかく、これだけの大規模の国際大会に日本オリエンテーリング界全体に強い感動を与えた。



環太平洋選手権大会（リレー：女子）の表彰。1位は日本チーム、2位はオーストラリアチーム

女子リレーで優勝した日本チームと 2 位オーストラリア（成績表から転載）



磁石を頼りに力走 OL 選手 大会関係



1 月 16 日朝日新聞朝刊 1 面



朝日新聞の「ひと」欄にも掲載  
大会後、朝日新聞に載った

## 初の海外 OL に感動 NZ

1984年1月にニュージーランドの南島のクライストチャーチから500km南東のランファリーで開催された。私は田口肇さんの引率でオークランド近辺をスタートし、ブレ大会と観光楽しみながらAPOCへ参加した。初めての海外旅行であり、大会参加であったため、南半球独特の植生や動物にも大きな興味を引かれながら、快適な旅をすることができた。

今回のAPOCはニュージーランドにとって初めての大きな国際大会であり総勢750名のエントリーで、そのうち外国人は約300名。大会はニュージーランド・オーストラリア対抗戦やニュージーランド選手権を兼ねるため、表彰式でも盛り上がりはすごかった。

個人戦は金鉱跡で行なわれ、H21Eでは村越真さんがAPOC3位に入り、D21Eでは木植早生さんが健闘した。



オタゴ・デーリーニュースの記事  
リレーのスタート

リレーは牧草地がスタートゴールで底を見下ろす小高い丘が観覧席という素晴らしいレイアウトで大きな声援が飛び交った。また、持参したO-MAPなどを交換あるいはプレゼントし親善を深める光景も見られた。

また、新聞にも大きく取り上げられ、若梅友行さんのお子さんがクリケットを楽しむ風景も掲載された。

## 大挙日本から参加 香港

海外でのオリエンテーリングを体験してみたいという気持ちが高まってきたときに丁度、日本人にとって手ごろな香港へのツアーは高い人気に支えられ、日本から大勢が香港に押し寄せた。1986年1月は全日本大会開催を目前とする愛知県委員会もビッグ大会運営の勉強も兼ねて多数参加した。

高層アパートの補修のために組まれた竹の足場や、時折見かける山火事など、日本にない風景に驚いていた。

日本からは170名が参加した。トレインは各日ともオープンな草地の丘陵で、眺めは最高。粘土質で硬く細い小径をたどることが多い。

競技の結果は女子リレーを除き日本勢の勝利で終わったが、これは、オーストラリア、ニュージーランドなどからエースの選手の参加がほとんどなかったのが要因のひとつであり、オセアニア勢が参加していればもっと厳しく興味深い戦いになっていたと思われる。

## 再びオーストラリアで

この大会の様子はO-JAPAN53号(1988.2.10)の田口肇さんの文から抜粋して掲載させていただいた。

オーストラリアのリゾート地のひとつであるタスマニア州でワールドカップを兼ねて開催された。世界15カ国から約700名の参加者を得て、総勢1300人近いオリエンティアが参集した。1985年のWOCをピークに横ばいまたは停滞気味といわれるオーストラリアのオリエンテーリング事情を考慮すると、ひとつの盛り上がりを見せた大会といえる。日本から最終的に29名がエントリーし、真夏の暑さに体力を消耗しながらも、カンガルーやワラビーの飛び回るユーカリの林の中でタフなオリエンテーリングに挑戦してきた。

日本勢はH21というクラスへのエントリーが多かったため、全般に芳しくなかった。

大会中に行われたAPOC会議では1992年の開催地について議論が行なわれ、日本に決定した。

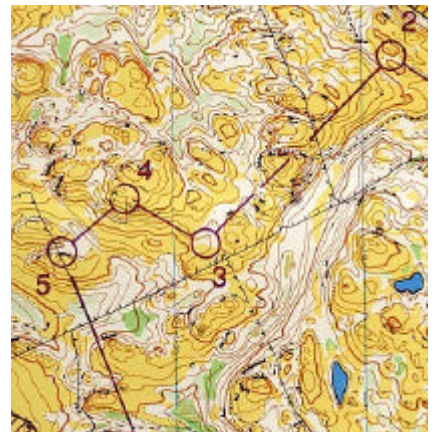
## O-JAPAN 企画ツアーでカナダ

1990年8月にカナダのブリティッシュコロンビア州のカムループスという町で開催された。バンクーバーとパンフのほぼ中間の高原で、カラカラの草地や小さいピークが多く岩がごろごろしている地形に日本の多くの参加者はとまどった。また、緯度・標高からは想像できない暑さも印象に残った。

コースでは上級クラスと初心者クラスの違いが距離のみであり、初心者には難しいコースであった。また21C、40Bと17Aが同じコースとなっていたのも話題になった。APOC上級コースは距離が非常に長く、O-JAPANを読み返してみると、「体力を使い果たしやめようと思った」、「5時間もトレインにいたことは日本では体験したことがない」という声がいくつか載っていて自分もずいぶんくたばりながらレースをしたことを思い出した。

O-JAPAN ツアー参加者は夏休み中の学校の宿舎で寝泊りしたが、快適であった。芝生にスプリンクラーで常時灌水により芝生だけは青々としていた。また、広い道路が縦横に走り、巨大な

郊外型スーパーがいくつもあり日本ではまだ見かけない姿に驚いた。



D21C、D40B、D17Aなど6クラスの個人戦コース(Dは女子の意味)

4,5日とカナダ選手権、6日がAPOCリレー、8日がAPOC個人戦をカムループスで過ごし、パンフを越えてカルガリーへ。冬季オリンピックの開催されたカルガリーから広大な麦畑を左右に見ながら、北上しキャロライン付近で開催された北米選手権に11,12に参加。フラットで切り開きが縦横に走る林が使われ、多くの参加者が日陰を求めて林にたたずむ放牧牛にも出くわし、びっくりしながらレースを楽しんだ。

## 富士と愛知で

1992年5月3日、4日に静岡県富士市の少年自然の家周辺で個人戦が行なわれた。



朝日新聞スポーツ欄

3日にクラシック(ロング)、4日にショートが行なわれた。外国からの参加が少なく、個人戦でのニュージーランドの活躍がめだったが、成績表には外国勢の名前はまばらで国際大会とし

てはやさびしい雰囲気であった。そんな状況下であったが香港から若いオリエンティアが多数参加してくれたのは救いだった。一方日本勢は多数の参加があり H21A (男子) だけでも 400 名以上の参加があった。

5 月 5 日に愛知県額田町 (現在岡崎市) にある愛知県野外教育センター周辺でリレーが開催され、優れたメンバーの揃った日本チームが男女とも外国勢を圧倒し、上位を独占した。

JOA のきしみ音が聞こえた大会でもあった。この大会の誘致に尽力した田口さんが発行している O-JAPAN には大会の様子がはなやかに報道されてよさそうなものだが、村越氏の運営を終えての手記のみであり、その中にも「JOA の問題を多くの人が実感できた」との記載がある。成績表も翌年 3 月になって発行される状態であった。

## 北島ウェリントン周辺で

1994 年ニュージーランドの首都ウェリントンの周辺で開催された。

1993 年 12 月 30、31 日、1 月 2 日の本番前の 3 イベントをニュージーランドらしい起伏のある牧場で体験。



モデルに使われたきれいな海岸林



パーティにて

日本勢は主力選手の参加が少なく、砂丘林と牧草地を使い 1 月 4 日に行なわれた個人戦では APOC 対象でも男子が 23 位、女子が 13 位と振るわなかった。またリレーにおいても男子は 3 位 (全参加チームでは 17 位) 女子も 3 位 (全参加チームでは 12 位) だった。ただし日本から参加した金並さんらのチームが全体 10 位になったもののトップから大きな差をつけられてしまった。

砂丘林は今までのニュージーランドでは経験したことがないようなフラットで木の間隔も広く、走りやすいところであった。

## 中国返還前に香港へ

1995 年年末から正月にかけて香港で開催された。中国への返還によりなんとなく不安を感じていた人が多く、返還前に香港でのオリエンテーリングを楽しんでおきたいという動機もあり、200 名近日本人が参加した。

海外旅行にも慣れてきたオリエンティアも多く、独自のプランで参加する人も多かった。私も友人と 2 人で参加することにした。当時まだ、ホームページもない状態で、要項を頼りに現地に入った。プログラムなどをもらうべきイベントセンターはコースウェイのスポーツハウスとあらかじめ情報を得ていたが行き当たらず、困っていたらレストランで隣席の老夫婦がたまたまスウェーデンからの APOC の参加者で、親切にモデルの行き方を教えてくれた。

モデルは 12 月 29 日。86 年と同じ場所であった。硬く固まった土と草に覆われ、走りにくく、また想像以上にコントロールフラッグが見えにくいことを確認。個人戦は 31 日半島の丘の上で、1 日のリレーは船で 20 分、更に歩いて 50 分の丘、翌日のショートも 60 分歩きの会場到着とアップ十分。

希に沢にある林はすべて通行不能な密生地。草地も走りにくく、遠回りでも小径を選択するのがベストルートであるが、地図上でも小径が見難く思うようにはいかない参加者も多かった。

O-JAPAN1996 年 1、2 月合併号には多摩 OLC の菅原さんの参加記が掲載されている。

## 万里の頂上の近くで

1998 年 10 月 12 日から 18 日に北京市街から北東に 80km はなれた密雲という万里の長城の近くで開催された、総勢 333 名の参加があった。日本からは 66 名で、中国の 73 名について 2 番目の参加者。

トレインは見た目は関西風の丘陵地でほとんどが畑と藪、それにラフオープンだった。畑を横切らないと行けないコースで、この記事のために大会の資料を提供していただいた大阪 OLC の阪本博さんは農家の方から「なにしているの?」とよく聞かれたとのこと。

地図はまだ世界の標準レベルには達していなかった。

個人戦 HE では中国が優勝。関西勢もいくつかメダルを獲得した。

宿泊は主催者が準備した宿舎を利用するのが原則だったが、スタッフ不足のせいか、宿舎内のインフォメーションセンターが大会期間中はなく、主催者との連絡が非常にとりにくい状態で、現地旅行社も困惑していた。

執筆にあたり横浜 OLC の清水潔さんからも情報をいただいた。



ゴールする阪本さん

## 若者が少なかった豪州

2000 年 7 月にブリスベンから約 160km 西へ入ったところで開催された。沖縄と同程度の緯度のため、現地では冬でも結構暖かった。従来の APOC と同様いくつかの事前イベントを経て 7 月 8 日に個人戦、9 日にリレーが開催された。

日本からの参加者は 30 名あまりとあまり多くなかった。盆・正月といった長期連休から外れたことや海外でのオリエンテーリング体験が一巡したことが考えられる。

今大会で気になったことは中心となるべき若者層の参加の減少であり、APOC 個人戦 M21A の参加者は 15 名とオーストラリアでも若者間での人気著しく低下していることが表れていた。このことは APOC 会議でも議論されたが、明確な対応案はでなかったようである。

個人戦は岩盤地帯、リレーはカンガルーと競争する比較的平坦な森で開催された。エリートでは大きな結果を得られなかったが、M21AS で山内亮太さんが優勝するなどまずまずの結果であった。

今回、WOC2005 の誘致のため、各国へ日本支援をお願いするのも大きな目的のひとつであり、各国の組織代表の方にもお会いできたと、久しく参加していないといわれた APOC 会議にも

オブザーバーながら尾上俊雄さんとともに出席した。

## 再びカナダ

2002年7月にアルバータ州で開催された。珍しくリレーが個人戦より先に開催された。オリエンテERINGマガジン 2002年10月号には参加した深沢博子さん、皆川美紀子さんの報告が掲載されているので、それを元に構成した。日本からはアメリカに次ぐ52名が参加。

リレーは静岡の勢子辻に似た比較的高低差がなく微地形が広がるところでおこなわれ、深沢さんは前日のカナダ個人選手権の反省を活かし、細かい地図読みと直進、動作を丁寧にすることを意識しレースをしたそう。またこのテレインには多くのオープンが入り混じっていて、遠くからでもその植生界がきれいにわかり、視界の広く持つことの大切さをあらためて感じたと振り返っていた。

皆川さんは参加者のテンションの高さと200名一斉スタート時の爆走に驚いたとのことだった。個人戦は秋吉台に林を点在させたような地形で、リロケート難しいテレインで、現在地を見失った時もあったとのこと。

カナダはロッキーなど自然を活かした観光地でもあり、レースとともに観光も大いに楽しんだようだ。

## 初のアジア中央での大会

こんな機会がなければめったに行けないところカザフスタンで2004年に開催された。今回はO-マガジン2004年10月号から横浜OLCの清水潔さんの報告を抜粋した。

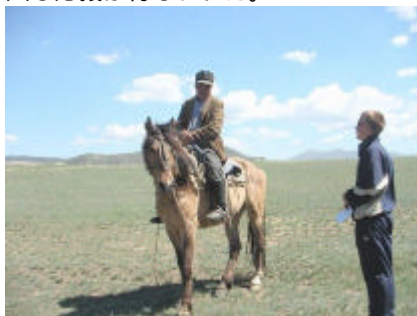
大会はカザフスタンの北東部ウスチカメノゴルスクで個人戦は5月27日にミドル、28日にロング、またリレーは5月30日に開催された。

参加者は全体で約500名。海外からは日本、オーストラリア、香港、ロシアがそれぞれ30名から40名、他はごく少数だった。

ソウル経由でカザフスタン最大の都市アルマトイへ行き、国内線に乗り換えウスチカメノゴルスクへプロペラ機で2時間半。大会会場へは主催者の準備したバスで隊列を組んでいきましたが、乗り心地は良いとはいえなかった。

カザフオープンの3レースをこなしたあと、APOCの個人戦に入った。ミドルは緩やかな片斜面でかなり見通しが利き、走っているのが良く見えた。ロングは保養地のようなところで小さい湖があった。この日もオープンで見通しがよいところ。リレーはウスチカメノゴルスク郊外の丘で行なわれ、盛

大な応援が行なわれた。



テレイン付近の村人

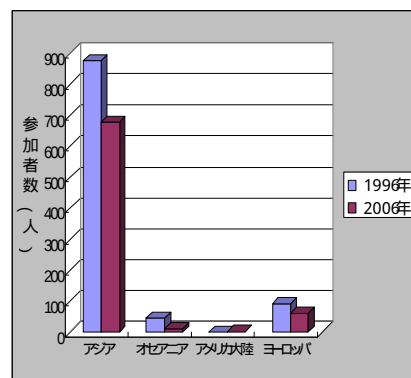


ロングのテレイン (M18、M35 のコース)

## アジア選手権への動き

2006年末から開催された。今まで2回は担当年の初めに開催されていたが、今年は1年遅れ。スプリント、ミドル、ロングの個人戦とリレーが実施され、種目もアジア選手権への布石になった。

前々回の香港でのAPOCでもオセアニアの参加が少なく、日本が多くの種目で勝利を収めたが、オセアニアの参加は一層減少した。一方中国からの参加者増によりアジア地域は、オセアニアほど減少しなかった。しかし日本からの参加者は67名と中国返還前に開催された前回の200名を超える参加者に比べると大幅に減少した。



前回の香港大会と参加地域の比較

12月29日に開催されたAPOCミ

ティングで長い間APOC事務局を受けてきたオーストラリアのホッグさんが退任し、香港に事務局が移された。2008年は韓国で開催されることが決まり、アジア選手権も併設することになった。

今回は香港の西部を中心にテレインが選定され、初日は公園らしいところでスプリント。女子は中国選手が1,2位を占めた。翌日隣接地でリレーが実施された。日本に思わぬアクシデントが発生。1走の女子皆川さん、男子佐々木さんが深い穴に落ちてしまった。佐々木さんは自力で這い上がり次走者につなぎ最終的に3位に入ることができたが、皆川さんは骨折しリタイヤ。

ミドルとロングは香港らしい草原の山を使って開催され、女子では番場さんが2種目とも制した。全体的には日本は高齢者の活躍がめだった。

また、今回はEカードを使ったため、ロングとミドルでは競技センターを町に置き、スタートとゴールは山の上に設けるという配置になった。従って、ゴールしてから山を下って、競技センターでEカードの読み取りを行うという新しいスタイルで運営された。

## 最後のAPOC

2008年7月に韓国ソウル周辺で開催された。かつて全日本大会などの機会に日本との交流があった韓国のオリエンテERING界であったが最近では北九州と交流がある程度で今ではその実力を推測しにくい状況であった。

その韓国にAPOCとともに第1回アジア選手権大会の開催をお願いすることに香港APOCで決まった。韓国は最大限に力を発揮し、日本の支援も加わり、成功に導いた。大阪で開催された全日本大会にド会長が来日され、PRされたのも加わり、日本からの参加者も多く、大成功であった。

大都会ソウルは縦横無尽に地下鉄が走り、その沿線で開催され、海外からの参加者はきわめて便利で快適なAPOCを楽しむことができた。

テレインは日本と間違ふかのような起伏で、植物も日本と同じであった。

選手権クラスは前回までのAPOCと異なり、参加国からの代表選手となる。高橋善徳選手や番場洋子選手はスプリント、ミドル、ロングの3種目を制覇。香港に続き、高齢者層は快進撃を続けた。

(小野盛光)

記事にはオリエンテERINGニュース、O-JAPAN、オリエンテERINGマガジンから引用させていただいたり、参考にさせていただきました。また、用語などは当時のものを使いました。